【緑地を楽しむ本】

『きのこ　ふわり胞子の舞』

写真・文　埴 沙萌　　ポプラ社　2011年

逆光で撮影された、オーロラのような神々しい感じもするきのこの胞子…表紙を見て、その美しさにみとれながらも、思はず息を止めてしまいます…自己防衛本能（？）でしょうか。

表紙のタマゴタケだけでなく、シイタケ、ヒトヨタケ、そしてあのヌルヌルのナメコでさえ、きのこのカサの裏からサラサラの細かい胞子を飛ばしている姿が、美しく撮影されています。 あの小さなきのこから、たくさんの胞子が飛んでいることにあらためて驚きます。 それでも、あちこちきのこだらけに、ならないということは、繊細な偶然が重ならないと育たないのだなと、松茸だらけの森を夢想してしまいます。

胞子は、枯れ木や枯れ葉の下などでめばえて菌となり、生長して菌糸になって、そして胞子をとばす道具としてきのこをつくるとか。 菌糸が、枯れ木や枯れ葉を食べるおかげで森はそうじされているのです。

町田でも、9月に入ってさっそく待ちに待った雨が降りました。 きのこも、雨が降ると元気になって、胞子をまきちらします。 ツチグリやクチベニタケは、乾燥している時には、ちぢんでいる胞子ぶくろを皮でおおったり、フタをして、守っていますが、雨が降るとふくらみ、おちてくるしずくの力で胞子をふきだします。 火山の噴火のような写真です。
胞子をとばす道具のきのこが、あんなに美味しいものになるとは！ でも、野山で「美味しそう」と見える素人の本能は、きのこにはあてになりませんね。気をつけなくちゃ。

（遠藤）